

22PO-am311S

上部消化管癌発生に関与する諸因子（特にアルコール摂取）の検討

○水谷 沙帆¹, 田中 早織¹, 加藤 沙苗¹, 加藤 裕司¹, 田口 真希¹, 島本 史夫¹ (¹大阪薬大)

【背景・目的】日本人の死亡原因の第1位は悪性新生物である。平成26年度消化器癌検診全国集計では胃癌発見率0.19%、食道癌発見率0.01%であった。上部消化管癌の発症に関与すると考えられている諸因子を統計学的に解析した。【対象・方法】上部消化管内視鏡検査を受けた人間ドック受診者（健常群）50,901人およびアルコール依存症患者（依存群）4,043人（共に重複省く）を対象とした。各群で胃癌、食道癌および前癌病変と考えられる食道低異型度上皮内腫瘍（低異型）と病理組織診断された患者の性別、年齢、飲酒歴（未飲/適量/過量）、喫煙歴、肥満度、ピロリ菌感染、食事習慣、他臓器癌合併を解析し比較した。統計学的処理は χ^2 乗検定を用いた。【結果】健常群の胃癌発見率は0.06%（男0.15%、女0.02%）、食道癌発見率は0.02%（男0.06%、女0.003%）であり、共に男性が有意に高かった。発見年齢で胃癌は60歳代、70歳代で、食道癌は60歳代、80歳代以上で有意に高かった。飲酒歴（未飲/適量/過量）では胃癌に有意な差はなかったが、食道癌は0.007%/0.044%/0.176%で飲酒量に比例して発見率が有意に増加した。依存群で胃癌発見率は3.19%（男3.51%、女1.94%）、食道癌は1.58%（男1.93%、女0.24%）、低異型を含む食道癌は1.93%（男2.36%、女0.24%）で、いずれも男性が有意に高かった。胃癌発見年齢は70歳代、食道癌は60歳代で有意に高かった。健常群では乳癌、子宮癌合併が、依存群では頭頸部癌（口腔、舌、咽喉頭）合併が多かった。肥満度、ピロリ菌感染には有意な差はなかった。【考察・結論】胃癌は健常群・依存群ともに高齢男性に多かった。食道癌は飲酒量に比例して発見率が増加すること、健常群に比較して依存群の発見頻度は極めて高く、比較的低年齢層に多かった。食道癌予防対策の一つとして長期習慣飲酒の改善が必要である。